

スザンナ・ウェスリについての一考察

岩本 助成

はじめに

スザンナ・ウェスリについて、筆者は、かつて、小論「ジョン・ウェズリとその両親」において論じた。¹ 本小論では、前論文と重複しないように心がけつつ、改めて、スザンナ・ウェスリの生涯を振り返り、特に、彼女の家庭教育についての考え方と、その実践について述べたいと願っている。準備的に二つの点に触れておく。

第一点は、前論文で強調したことであるが、ジョンやチャールズにとっての母スザンナを論じる場合、それは、決して父サミュエルを無視したり、軽視して論じるということであってはならないという点である。「両親」という視点を重要視しなければならない。すでに述べたことであるが、ジョン・ウェスリは、父サミュエルと母スザンナに対して、ほぼ同数の手紙を書き送っているという。つまり、彼の敬愛の思いは、父か、母かのどちらか一方に偏っていなかったのである。俗説が作り出す「母親への敬愛が余りにも強烈であったゆえに、不幸な女性関係をもつに至った息子のジョン」というイメージは、色々な事実関係を調べれば調べるほど、実際の母子関係や家族関係と、まったく合致しないものであることが分かってくる。

ジョンのみならず、ほかの成人した9人の兄弟姉妹たちも、父と母に対する

¹ 「ジョン・ウェズリとその両親」、『神学と人文』第21集（大阪基督教短期大学紀要、1981年）115-134頁。

敬愛の念を、生涯、抱き続けていた。父には父に対する尊敬を、そして、母には母に対する敬愛を抱き、10人の子どもたちは、親密な親子関係を保持しつつ、それぞれの生涯を真摯に生きたのである。従って、スザンナを論述する本小論でも、夫としての、父としての、また、司祭としてのサミュエルという存在を忘れることなく、つねに、その視野に収めていたいと願っている。

もう一つの準備的な考察が必要であろう。それは、スザンナ・ウェスリという人物が生きた第17世紀半ばから、18世紀にかけてのイングランドにおいて、女性という存在がどのような立場にあったのか、という課題である。

英国の歴史学者ロイ・ポーターによると、第18世紀イングランドでは、公的生活は男性のものであり、女性は男性の影のようなものと見られた。まさに、男性上位が基本的前提の社会であった。父系制の家族であり、歴史的資料のほとんどが、男性の手によるものであった。第19世紀に入った頃でさえ、女性は法律上、不利な立場を強いられて公職にもつかなかったと云う。²

そのような時代に、以下に述べるスザンナ・ウェスリという一女性が生きたのである。夫サミュエルと共に、彼らが大きな影響を与えた子どもたちや孫たちは、それぞれの歩みにおいて、大きな社会的貢献を果たした。特に、三人の息子は、聖職者となり、宣教や教育ほか、広い分野で活躍した。特に、次男と三男は、信仰復興運動で中心的な役割を果たした。メソジスト運動が、当時の多くの女性に、価値創造的な活力と将来展望を与えたかは、今後、さらに研究され続け、明らかにされていくであろう。特に、メソジストのクラス、バンド、ソサエティにおける女性と女性指導者たちの役割は、特筆すべき事柄である。これらの女性たちが全国的に展開した諸活動、宣教をはじめ、教育、福祉など、多方面にわたる働きの背後に、スザンナ・ウェスリの存在を、決して忘れることが出来ないのである。

最近、ウェスリ研究における女性研究者たちの研究が顕著であり、優れた成

² ロイ・ポーター、目羅公和訳『イングランド 18世紀の社会』法政大学出版局、1996年、30～48頁。邦訳文献として、ブリジット・ヒル、福田良子訳『女性たちの十八世紀：イギリスの場合』みすず書房、1990年が参考になろう。

果が、次々と世に問われていることは喜ばしい限りである。³

では、以下において、スザンナ・ウェスリの生涯を概観し、その家庭教育の理念と実践について論じることにした。

1. スザンナ・ウェスリ (Susanna Wesley, 1669～1742) の生涯から

スザンナは、1669年1月20日、ロンドンの Spital Yard, Bishopsgate に住むサミュエル・アンズリ牧師 (1620-96) とメアリ夫人の第 25 子、末娘として誕生した。アンズリ牧師は、リチャード・バクスターの親友であったと言われ、ロンドン非国教会派の指導的な長老派牧師であった。スザンナは、福音信仰と靈性に富み、教養豊かな家庭で育てられた。生来、靈的な事柄にも、知的な面でも、研究熱心であり、敬虔な思いに満たされていた彼女は、1681年頃、まだ、少女時代にもかかわらず、教会教理の問題に深い関心を抱くようになり、両親が属する非国教会の伝統よりも、国教会の教理と伝統を選び取りたいと、ついに国教会に改宗したのである。

ここで、驚くべきことは、この出来事によって、彼女と両親との愛のかかわりが、その後も、変わらなかったという事実である。特に、父サミュエルは、娘の改宗から大きなショックを受けたに違いあるまい。また、非国教徒の陣営からも、この有数な指導者一家やスザンナに対する非難や中傷が起こったとしても、何の不思議もなかろう。にもかかわらず、スザンナの改宗によって、家族の愛の絆は、決して損なわれることなく、彼らは互いを理解し、尊敬し合いながら、その後も愛し合い、支え合っている。ここに、スザンナと、子どもたち、孫たちに流れていた世界教会な考え方と、そのような信仰に基づく幅広い理解と生き方を示され、ウェスリ一家に流れるエキュメニズムの源泉の一つを見出すのである。

スザンナには、世界教會的な、靈的で知的な伝統が流れとなって合流していた。あくまでも「聖書を中心」にしなが、初代教会から、中世教会、宗教改

³ Deborah Madden (ed), *Inward & Outward Health*, (Epworth, 2008); Deborah Madden, *'A Cheap, Safe and Natural Medicine': Religion, Medicine and Culture in John Wesley's Primitive Physic*, (Rodopi, 2007); Vicki Tola Burton, *Spiritual Literacy in John Wesley's Methodism*, (Baylor Univ. Press, 2008), 特に、第 5 章。

革期を経た豊かな伝統に、特に、国教会の『祈祷書』を中心とする靈性に、スザンナは豊かに育まれた。また、幼い日からのピューリタンの伝統、さらに、夫サミュエルに教示され、生涯にわたって愛読したと云われるパスカルの著作など、ローマ・カトリックの靈性の流れ、そして、ロックなどの当時の現代思想が⁴、多彩色の織物のように、彼女の人間形成に織り込まれている。それらは、スザンナ独自の思想形成の中に織り成されているゆえに、研究者たちの「解釈の枠」に、彼女の信仰、思想、実践を閉じ込めてしまわないように心掛けたいものである。要は、スザンナをして、つねに、スザンナ自身を語らせることこそ、もっとも重要である。⁵

1688年11月12日。スザンナは、同じように、非国教会派から国教会に転じて、オックスフォード大学で学び、司祭となったサミュエル・ウェスリ (Samuel Wesley, 1662-1735) と、St. Marylebone Parish Church で結婚式をあげた。サミュエル 26 歳、スザンナ 19 歳の秋であった。詩作など、文筆の賜物を与えられていたサミュエルは、ロンドンで副牧師や軍隊付チャプレンを続けつつ、文学界にも連なっていた。1690年2月10日、彼らに 長男サミュエル・ジュニアが誕生した。以後、夫婦に 19 子が与えられたと云うが、当時の家庭同様、嬰兒期に多くの子どもたちを亡くしたので、その数は正確には分からない。成人した子どもは、サミュエル、ジョン、チャールズと男子が3名であり、女子は、エミリア、スザンナ、メアリ、メヘタベル、アン、マーサ、ケズィアの7名であった。

1697年5月6日に、司祭 サミュエル・シニアは、エプワス教会 (リンカンシャー) の司祭となって、一家は司祭館に入った。当時のエプワスは、人口約

⁴ スザンナの教育観と、ロックの教育思想との関連については、Charles Wallace Jr. *Susanna Wesley : The Complete Writings*, (Oxford University Press, 1997) p. 368 を参照。なお、Rebekah L. Miles, “Happiness, holiness, and the moral life in John Wesley”, *The Cambridge Companion to John Wesley*, (eds. Randy L. Maddox and Jason E. Vickers, Cambridge University Press, 2010) p.222 の論述も参考になる。

⁵ この点で優れた文献は、Charles Wallace Jr.の前掲書であろう。ウォレス博士は、スザンナに関する資料を網羅し、スザンナをしてスザンナ自身を語らしめている。「スザンナに関する良い文献一冊を」と求められるならば、本書を推薦したい。

2000人の寒村であった。そのような村落で、スザンナは、ロンドンの知識階層の家庭でも稀有であったような、高質な家庭教育を展開したわけである。

サミュエルとスザンナの二人の意見には、対立する点があったものの、共に王党派のトーリであり、特に、スザンナの場合は、「臣従拒誓者的な見方」を貫いていた。いずれにせよ、生粋のロンドン子で、病弱気味であった彼女が、干拓地の分配問題のこじれから、反王党派に徹していた片田舎、エプワス教区の司祭夫人となったわけである。

サミュエル司祭は、その生涯を通して、エプワス教区を心から愛した聖職者であった。彼は、大作『ヨブ記』を遺したほどの学徒であったが、もともと、文学者、詩人肌の人物であつたらしい。牧会に精出すが、不幸にも、上記の理由から、教区民との対立が絶えなかった。彼の弱点は、経済問題に疎かった点にあり、その点でも、スザンナの貧困との戦いという苦労は絶えなかった。夫婦間の政治的な意見の衝突のことを、子どもたちがよく知っていたにもかかわらず、両親への尊敬が、決して変わらなかった点に感銘を受ける。

1705年には、サミュエル司祭が、エプワス地域の政争と負債問題のこじれゆえに、リンカン城に投獄されるという事態が生じた。留守宅の貧困を案じたヨーク司教シャープによる支援の申し出もあり、有力者たちによる援助を受けて、やっと釈放されることになった。しかし、サミュエルの刑務所での経験が、後に、息子たちに刑務所の悲惨な現状を教えることにつながり、彼らによる刑務所訪問や、その改良運動、さらには、貧者救済の活動へと発展して行ったことを思えば、彼や一家の経験が悲惨であったとだけ、片付けるわけに行かない。

それ以上に、忘れ得ぬ出来事であったのが、1709年2月9日夜の司祭館焼失事件である。政敵による放火なのかは不明だが、司祭館が焼失してしまい、逃げ遅れたジョンが奇跡的に救出されるという大きな事件であった。この火災で、スザンナは、全財産のほか、それまで書き残していた文書類と、父アンズリ牧師から譲られていた貴重な図書のすべてを失ってしまった。さらに、彼女が受けた最大の打撃は、後述するように、子どもたちが、散り散りに信徒宅に預けられたために、スザンナの「司祭館教育」が、一時期、頓挫してしまい、せつかく、子どもたちに根付き始めていた幼児教育の成果が、一挙に崩されてしまったことにあった。

しかし、そのような試練に打ち負かされるウェスリ司祭夫婦ではなかった。1710年、あるいは、11年、スザンナは、「再建された司祭館」での「司祭館学級」と、小さい集会を始めるに至った。夫サミュエルは、ロンドンの聖職者会議へ出席して1年近くも滞在し、スザンナが始めた司祭館での集会について、ロンドンのサミュエルに、司祭館での集会に喜んで出席する会衆数に嫉妬した司祭補が、たびたび、告げ口をした結果、スザンナは、夫との間に、後述の通りの厳しい手紙のやり取りをすることになった。⁶

1724年、近くのルート教会をも兼牧することになったサミュエルは、オックスフォードで教えるジョンが、この教区司祭の後継者となることを熱望するが、ジョンは、父の希望に従えなかった。1735年4月25日、サミュエル司祭が帰天した。最期まで「内的宗教」を息子たちに説き聞かせた72歳の父の死であった。当然、司祭館から出て行かねばならなくなったスザンナは、11月、教師をしていた長女エミリア宅をはじめ、各所に寄寓する身となったが、翌年、もっとも親思いで、ティヴァトンで学校長をつとめる、詩作の賜物豊かな長男、司祭サミュエル・ジュニア宅に落ち着くことが出来た。

しかし、彼女の上にもふりかかって来た激しい試練は、それで終わらなかった。1739年11月6日、スザンナが一番、頼りにしていた長男サミュエル・ジュニアが、わずか、数時間の患いで死去したからである。48歳の若さであった。幼い時から、子どもたちの中で、もっとも優秀であったのは、サミュエル・ジュニアであったろう。彼は、親孝行の模範というべき存在であり、若くして母校ウエストミンスター校の教師に選ばれた後も、貧しい家族への仕送りを続けていた。チャールズをはじめ、弟妹の学びのために、経済的な支援をも惜しまなかった。ジョンとチャールズのふたりの弟が始めた信仰復興運動に対しては、教会の秩序を乱さないようにと、忠告し続けた。サミュエル・ジュニア司祭と、その妻をはじめとする一家の存在が、いかに傷心のスザンナを慰め励ましたことか。その彼が、急病のために帰天したのであるから、スザンナは、癒され難い悲しみを負いつつ、娘マーサ宅に寄寓し、更に次男、司祭ジョンのロンドン・ファンダリに寄寓することになった。しかし、それこそ、信仰復興運動をより

⁶ 1711年2月6日付けの手紙を参照すること。

深く理解して、ジョンとチャールズを励ましながら、「メソジスト運動の母」として、出発する糸口になったのである。そして、1742年7月30日、スザンナは、ジョンのところで、帰天した。73歳であった。「子どもたち、わたしが解き放たれたら、すぐ、主をほめたたえる詩編を讚美してください。」が、彼女の遺言であったと云う。8月1日、スザンナの遺体は、非国教徒が多く葬られているシティロードのバンヒルフィールド墓地に埋葬されたが、それは、ちょうど、ジョンのシティロード・チャペルの真向かいに当る場所である。

当初の墓碑銘は、伝道旅行のために、最期の病床にはべることが出来なかった三男、チャールズがささげた聖詩であった。

「スザンナ・ウェスリ夫人　ここに眠る。

サミュエル・アンズリ博士の末娘で、最後まで生き残った人物。

復活を堅く、確実に信じ、天上の住処を確信していた一キリスト者がここに眠る。彼女の十字架は、今や、天の栄冠に取り替えられて。

まことに苦難を負う娘として、労苦と悲慘とに伴われ、

悲しみと恐れの長夜を嘆き明かしたが、その長い夜は、七十年にも及んだ。

折から、御父は御子を啓示され、かのパン屑を知らせられたので、⁷

彼女は罪の赦しを知り、体得し、天国への保証を見出した。

彼女は、上なる交わりに馳せ参じて聞き取った。

『起きよ、わが愛する者よ。』との召しの声を。

死の床で『わたしは従い行きます』と答え、子羊なる主が従われたように主の子羊として、眠りについた。』

2. スザンナ・ウェスリの家族教育の理念と実践について

いわゆる『教育的な手紙』⁸のうち、その一通を読み、彼女の信仰と家庭教育

⁷ 愛息チャールズが、母の生涯をどのように見ていたかが、この聖詩でよく分かる。このくだりは、1739年4月、スザンナが受けた聖餐桌での恵みの経験を指すものであろう。

⁸ いわゆる「教育的な手紙」は、長短の二通に編集されている。ジョンの日記に付せられた長い手紙は、本論文に付加資料として訳出している。短い手紙は、*The Works of John Wesley, Vol. 25, Letters I, 1721-1739* (ed. Frank Baker, Clarendon Press,

の理念・実践から（賛否両論あろうが）「学ぶべき点」を教えられたい。長い『手紙』（1732年7月24日付け）を、本小論の終わりに「資料」として訳出するが、ここでは、その要点を述べたい。この手紙は、当時、63歳のスザンナが、司祭生活3年目の29歳の次男ジョンに求められて、一度は断ったものの、この手紙を記し、それを、ジョンが編集して、自らの雑誌に掲載したものである。

まず、子どもたちの嬰兒期から幼児期に至る一日の生活を描く。一日三回の食事が与えられる。初めは、幼児用の小さなテーブル（みんなの顔が見渡せる配置になっている）が、ナイフとフォークを使えるようになると、両親と一緒にテーブルにつくようになった。

「子どもの精神形成のためには、意志を抑制して、従順な気性を培うことこそ、真っ先にすべきことだと考えます。理解力を養うためには、時間がかかります。子どもたちがそれらを行うことが出来る力にに応じて、徐々に進めていかなければなりません。しかし、意志の抑制ということは、すぐに行なわなければならないことであって、それは早ければ早いほど良いことです。時期に応じて行なうことを怠りますと、手に負えない強情な子どもになってしまい、その後は、子どもたちを矯正する親の方が、耐えられないような厳しさを味わうことなしには、その子を矯正することが難しくなってしまいます。」

良い習慣ではなく、悪い習慣を許してしまった親は、親切で物わかりが良い親どころか、虐待する親だと、スザンナは述べている。「意志の抑制力」を、彼女は、「宗教教育の唯一で、強力で、理にかなった基礎」だと論じる。子どもの理解力が成人のものとなるまでは、両親の理性と敬虔によって「意志の抑制」につとめることが大切だと主張する。「自分勝手な意志は、すべての罪と悲惨さの根源」と言い切る。また、わざと犯した罪ではなく、子どもらしい愚行や不注意の場合は、過ちがいけない理由、意味、事情をよく説明してやり、穏やかに注意するだけに止めることを説く。

次に、実践例に入る。「ものが言えるようになると、すぐ、『主の祈り』を教え」た。起床時、夜、寝るときも、主の祈りを祈った。「少し大きくなって来ま

1980) pp. 330–331 に所収されている。なお、説教96の「両親への服従について」でも、ジョンは母の手紙を引用しながら、述べている。

すと、主の祈りに加えて、両親のための短い祈り、いくつかの特祷文 [『祈祷書』の短い祈祷文]、覚えることが出来るほどの短い信仰問答文、聖書のある御言葉を教えられました。」と記している。ここでは、やはり、聖書日課を含む『祈祷書』や、幼児向けの書物の必要性を教えられる。

「よくおしゃべりが出来たり、歩いたり出来るようになる前の小さな頃から、安息日が、ほかの週日とは違った日であることを教えられました。」

泣いてもせがんでも何も得られないことを早くから理解し、欲しいものは穏やかに求め、下働きの人々にも「どうか何何をしてください」と丁寧に頼むこと、兄弟姉妹が「ブラザー、シスター」をつけて、名前を呼び合うことを躰けられた。

5歳までは、読み書きを教えられなかった。読み書きでは、個人差があり、末娘のケジィだけは、ほかの子どもが数ヶ月で済むところを、数年かかったと云う。5歳の誕生日の前日、家中が片付けられ、誕生日には9時から12時までと、2時から5時まで、集中して教えられた。その子にとっての「司祭館学級の始まり」であった。ほかの子どもによる勉強部屋への出入りは、はっきりと禁止された。子どもたちは、大文字と小文字を学習した。しかし、モリィとナンシーは時間がかかったので、スザンナは子どもたちに個人差があることを再確認した。

非凡な記憶力を持った長男、サミュエルのごときは、2、3時間でアルファベットを覚えたとのことである。文字を覚えたら、『創世記』から読み始める。学課が長くても短くても、終わるまでは、部屋を出ることは許されなかった。ほかに『子ども用教本』を用いた。

数年間は、スザンナの教育法は成功していたが、前述の通り、司祭館の焼失の結果、一家が離散することになり、母親であり、最初の教師であった彼女の教育法は、壊滅的な打撃を受けた。それぞれに、信徒宅に預けられた子どもたちが、善悪の判断で混乱し、安息日の軽視、悪い習慣や下品な態度などを覚えて帰って来たからである。

再建された司祭館で、聖書と祈りを中心にした「厳しいしつけ直し」が始まった。朝夕の学課の終わりには、詩編の御言葉の讃美が加えられた。5時に学習が終わった時、詩編と新約の1章が、次の朝には、詩編と旧約の1章が、最

年長の子どもによる「読み聞かせ」で続けられた。朝食や家族との交わりまでは、それぞれの「祈りの時」と習慣つけられたと、スザンナは喜んでいる。ほかに「決めごと、内規」があった。

(1) 処罰への臆病さと恐れが、ウソを呼ぶので、正直に言い表し、改めることを約束すれば、誰もムチ打たれない。「家族のある人」を除けば「ウソの防止に役立った」。

(2) 教会でウソをついたり、物をくすねたり、遊んだりするような罪深い行動や、主の日の不従順やけんかなどは、断じて処罰を免れさせてはならない。

(3) どの子どもも、同じ過ちのために二度、小言を言われたり、叩かれたりすることはない。改めたら、咎めない。

(4) 従順ですぐれた行動は、特に、自発的である場合、いつも褒められ、ご褒美の対象になる。

(5) 従順な行動は、たとえ、うまく出来なかったとしても、大事に受け入れられるべきである。

(6) 礼儀作法の重視。他人の持ち物は、ピン一本でも、持ち主の許しなしに取り上げてはならない。この世で守るべき正義を重視させることになる。

(7) 約束を守ること。与えると約束した物を取り返してはならない。約束の義務を果たすこと。

(8) 女の子どもは、上手に読むことが出来るまでは、裁縫など、働くことを教えるべきではない。スザンナは、「きちんと聞き取ることが出来、理解出来る読み方をする婦人たちがこんなにも少ない」わけが、ここにある。と述べる。これは、当時の女子の家庭教育の考え方の、ちょうど逆であった。そこにスザンナの非凡な教育観と実践とがあったのである。

3. 家庭教育に伴う報告・説明責任(アカウントビリティ)をめぐって

先に述べたサミュエルとスザンナの往復書簡の中で、「司祭館での集会を止めるように勧める」夫に対して、スザンナは、1711年2月6日付けの手紙で、ロンドン滞在中の夫に、次のように書き送っている。⁹

⁹ *Journals and Diaries, II (1738-42)*, W. Reginald Ward and Richard P. Heitzenrater

「わたしはひとりの女性であり、大家族の主婦です。家族の霊性の主な責任は、あなたの上にあるとは言っても、お留守中は、天と地にわたる大家族の主なる御方によって、わたしに託されたいのちを、よく養わずしては、主に申し訳が立ちません。・・・わたしに、養い育てる力をくださった主なる神様が、報告を求められたならば、どのようにお答えするべきでしょうか。

・・・わたしの考えでは、主の日をもっとも厳格に考えて、教会出席だけではなく、そのほかの空いた時間をも、敬虔な信仰的なことに従って過ごさねば十分ではないと考えまして、家族に読んで聞かせたり、話をしたりすることをわたしの義務と考え、わたしがひとりで退いて静かに祈るよりも一層、神様の御心にかなうことだと考えました。

・・・その後、使用人がその両親に話し、仲間に入るようになってからは、それを聞きつけた人々が、ひとり、ふたりと増えて行き、ついに 30 人になり、昨今では、稀に 40 人に達することさえある状況になってしまいました。・・・

わたしは男性でも、聖職者でもありません。けれども、もし、わたしの心が、真実に献げられたものであり、神様の御栄光に対する真の熱意に啓発されているとすれば、わたしが、今、していることよりも、さらに、それ以上のことが出来得るであろうと思い、少なくとも、彼らのために、もっと熱心に祈ることが出来ると思いました。また、わたしが言葉を交わす人々に、もっと温かい同情、熱情を抱いて、語り合うことが出来ると考えて、まず、子どもたちにそれらを実行しようと決心しました。方法は、毎晩、少しずつ、時間を作って、子どもたちにひとりで話して聞かせようといいました。月曜日は、モリー、火曜日は、ヘッティ、水曜日は、ナンシー、木曜日は、ジャッキー、金曜日は、パティ、土曜日は、チャールズ、日曜日は、エミリーとスキのふたりに決めました・・・。」手紙はさらに続いている。

結びに代えて

(1) 前項で述べた通り、スザンナは、夫に「もし、司祭館での集会を止めなさい」というのであれば、勧めではなく、命令してほしいこと、さらに、その

(eds.), *The Works of John Wesley*, Vol. 19: 284-291.

命令は、主なる神様の裁きの座において、はっきりと報告して、主の御前で申し開きの出来るものであってほしいと述べている。これこそ、主なる神様に対する報告・説明責任（アカウンタビリティ）であり、ひいては、主が与えてくださったいのちに対する報告・説明責任でなくて何であろうか。

「タラントンの譬え」が示すように、主なる神様は、預けられたタラントンの活用について、説明責任を問われるのである。その際、タラントンの額は問題視されていない。5タラントンと2タラントンの人を比べるならば、確かにタラントンの額は倍であったり、半分に過ぎなかったりしている。しかし、タラントンを預けた主人は、アカウンタビリティを果たした両者に、まったく同じ賞賛を与えている。しかし、タラントンを死蔵した人の場合だけ、賞賛は叱責に変わっている。彼は、報告・説明責任を果たしていないからである。

スザンナは、自分が実行している司祭館での集会を禁止するのであれば、主の座に出たときに、申し開きが出来、報告・説明責任を果たせるように、夫サミュエルに求めているのである。

(2) 確かにスザンナの子もたちへの教育は、聖書の御言葉と祈りに満ちたものであり、日記をつけることを始め、良い習慣を幼いうちから与えて置きたいという願いのもとに、とても厳格なものであったが、上記の「一对一の語り合い」を考えても分かるように、「ひとり、ひとりの魂、靈性への深い愛情に満ちた教育」でもあった。特に、上の娘たちへの『主の祈り講解』『一問一答集』『十戒講解』『使徒信条講解』（恐らく、ほかの兄弟姉妹への回し読みが行われたと察し得る）を見ても、いかに、ひとり、ひとりの個性や特徴を考えた上で、愛の配慮に満ちたものかが、よく分かる。

当時、ロックをはじめ、啓蒙思想家の中にも、類似した考えのものがあるが、相互の関係を否定することは出来ないが、彼女の教育理念のみならず、その実践は、卓越したものであったと考える。子女や孫の中には、後年、伝道、牧会のほかに、教育に携わった者や、文学、思想、音楽、芸術に関係した者があり、しかも、それらが決して一般民衆と共に生きることから離れなかったという点に注目したい。

(3) 付言しておきたい点がある。一見、不幸に見えるジョンや、ほかの娘たちの家庭生活が、両親、特に、スザンナのせいではないかという俗説につい

て、である。(a) 結論から申せば、各人の歩みは、各人の事情、境遇、特質によるものであって、俗説には、これらの複雑な人間関係、込み入った事情を無視する傾向が強い。自他に対する優しい眼差しを育てたく願う。¹⁰

(b) スザンナの愛情をもっとも注がれた人物と言えば、長男のサミュエルであったが、彼ほど、また、家族のために犠牲を払った人物も、ほかにいない。両親を助け、兄弟姉妹を支え、自らの生活を省みず、家族を大切にしたのは、サミュエル・ジュニアその人であり、彼の最大の理解者であった妻であった。

しかし、そのような温かさに満ちたサミュエルやチャールズの家でも、それに恵まれなかったジョンをはじめ、姉妹のひとり、ひとりも、それなりに、一生懸命に生きたのであって、すべての者の欠点、弱所に拘わらず、その生きさまは尊いものだと考える。

(c) ジョンの場合を考えても、彼がロンドンのパブリックスクール、チャーターハウスに向かったのは、僅か 11 歳の幼い時であった。想像以上に、自立心旺盛な子どもであったことを、この事実は示している。それは、彼のほかの兄弟姉妹にも当てはまることであった。

(d) スザンナの優しさと共に厳しさによって育てられた子どもたちであるが、両親への服従、従順、共感だけではなく、反感と反発を秘めていたかも知れない。しかし、全体的に見る時、父サミュエルと母スザンナに対する反抗は少なく、逆に、子どもたちの両親への敬愛は、驚くべきものであった。

当然、子どもたちは、各自、その両親とは異なった道を歩んだ。彼女の 墓碑銘を記した三男チャールズの場合、母の苦難に満ちた生涯を振り返りつつ、自分の子どもたちに対しては、母とは別の教育方法を取ったと思える。それが、成功であったのか、失敗であったのか。誰にも判定出来ない。軽々しく、成功、失敗の範疇で人を裁く愚かだけは、避けたい。

スザンナ・ウェスリというひとりの女性が、主によってこの世に与えられたことを、そして、ウェスリ一家に生きた彼女が、聖書を第一にして、さまざまな苦難の中であって、祈りと讚美を絶やすことなく、子どもたちと共に、墓碑

¹⁰ 以下の叙述で、筆者は、Henry D. Rack, *Reasonable Enthusiast: John Wesley and the Rise of Methodism*, (Epworth Press, 1989), pp. 45-60 の解釈に多くを負っている。

銘にあるように、「贖いの子羊なる主に、あくまでも従い行く従順な子羊としての歩みを全うしようと生き続けた」ことを覚えていたい。このひとりのキリストの証人の「ありのままの姿」を発掘して学ぶ業は、決して徒労には終わるまい。

付加資料 (スザンナの教育的な手紙、1732年7月24日付け¹¹、()は訳注)

「あなたの求めに応じて、わたしが子どもたち (family) を教え育てるときに守った主な原則を集めて見ました。心に思い浮かぶままに記したものを、今、送ります。(これが誰かの役に立つと思われたら)、順序などはあなたの考え通りに変えて用いてくださってかまいません。

子どもたちは、生まれてこの方、下着を脱いだり着たりすることなど、自分で出来ることについては、きちんとした、いつもの方法を教えられていました。最初の3ヶ月間は、大体、眠って過ごします。それから、揺りかごの中で目を覚ましていたり、ゆられて眠っていたりします。目覚めの時まで、揺すぶられていました。規則正しい眠り方をもたらすためになされたものです。最初は、午前中、3時間、午後も3時間。その後は、2時間というふうに減って行って、眠りの時間が要らなくなるまで続けられました。

満1歳になるころ(ある子どもはそれ以前に)、子どもたちはムチを恐れることと、おだやかな声で泣くことを教えられました。そのことによって、子どもたちは、あるいは受けなければならなかったかも知れない多くの体罰から免れました。ですから、子どもたちが上げる騒々しい泣き声は、私たちの家からはほとんど聞こえたことはありません。ひとりの子どももいないかのような静けさの中で、家族はいつも暮らしていました。

成長して来ますと、一日三食の食事が決められていました。食事の時は、子

¹¹ *Journals and Diaries, II (1738-42)*, *op. cit.*, pp. 286-291 を用いた。なお、ウォレスの前掲書、369-373 頁にも編まれているが、52 項目の注記が加えられており、読者の理解を助けている。

どもたちがみんなを見渡せるように、私たちの傍に彼らの小さなイスとテーブルとを置きました。子どもたちは許されるだけ食べたり、「薄められた飲みもの (small beer)」を飲んだりすることになります。それらをねだることは許されません。何か欲しいものがあつたら、いつも世話をしている召使いに囁きかけるのです。そして、召使いが私のもとにやってきて、そのことを伝えました。ナイフとフォークが使えるようになったら、私たちの食卓につかせました。しかし、食物について好き嫌いを言うことは許されず、いつも子どもたちのために準備されたものを食べるようにしつけられました。

朝食は、いつも幼児用のやわらかいものか、流動食 (spoon-meat) でした。時には、夕食も同じでした。しかし、何を食べるにしても、それ以外のものや無くても十分に済ませるような食べ物を欲しがることは許されません。間食は、たまにかかった病気の時以外は、一切、許されませんでした。また、料理中の台所使用人のところへ行つて、何か食べるものをねだることも許されず、もし、そのようなことをしたことが分かつたら、子どもたちは叩かれ、使用人もきびしく叱られました。

夕方 6 時に、家族の祈りの時が終わると、夕食が始まりました。7 時に召使いにからだを洗ってもらい、一番、小さな子どもたちから始めて、順々に、着替えを手伝ってもらつて 8 時にはみんながベッドに入りました。召使いは、いくつかの部屋に分かれて眠る子どもたちが、まだ起きている内に、部屋から去って行きます。子どもたちが眠るまで、ベッドの傍についていることなど、私たちの家庭では許されなかったのです。

子どもたちは、与えられたものをきちんと食べたり、飲んだりするのが常でしたから、誰かが病気になつても、とても飲みづらい薬を飲ませるのに苦勞したことはありません。たとえ、誰かがお薬を飲まずに捨てたいと思つたとしても、それらを拒むことはありませんでした。このようなことを書く理由は、人は、その口に合わないようなものであつても、それを食べるしつけを教えらるべきだということを示すためです。

子どもの精神形成のためには、意志を抑制して、従順な気性を培うことこそ、真つ先にすべきことだと考えます。理解力を養うためには、時間がかかります。子どもたちがそれらをする事が出来るようになる力に応じて、徐々に進

めて行かなければなりません。しかし、意志の抑制ということは、すぐに行なわなければならないことであって、それは早ければ早いほど良いことです。時期に応じて行なうことを怠りますと、手に負えない強情な子どもになってしまい、その後は、その子どもを矯正する親のほうが、耐えられないような厳しさを味わうことなしには、その子を矯正することが難しくなってしまいます。

世間の評価では、後になって捨てさせねばならないと分かっている悪癖を許してしまう親たちを、親切で物分りが良い親として見過ごすようですが、私は子どもを虐待する親だと考えます。それどころか、ある親たちは、馬鹿げた溺愛を注ぎ、後になってから、子どもたちがそれをやったと言って、打ちたたかなければならないようなことを、ふざけて許してしまっているのです。子どもという者は、矯正される時には、いつでも抑制力をつけるものです。それは、放任し過ぎてわがまま次第にならないうちは、大して難しいことはありません。子どもの意志がまったく抑制されて、彼らが両親に対する恐れと敬いの念に満たされるようになれば、いろいろな子どもらしい愚行や不注意なことを犯したとしても、それはそのままにしておいてよいことです。ある子どもは気ままに何の咎めも受けず、また、ある子どもは穏やかに注意されるということになりますが、わざと犯した罪でなければ、子どもたちが犯した過ちのいけない意味と事情をよく説明してやらねばなりません、せつかんをすることなしに許してやらねばなりません。

私は子どもたちの意志の抑制力を、遅くならないうちに養っておきなさいと申し述べているのです。これこそが、宗教教育の唯一で、強力で、理にかなった基礎だからです。このことをしないで、いくら教訓を垂れても、模範を示しても効果はありません。しかし、このことを徹底して行なうならば、子どもの理解力が成人のものとなるまでは、両親の理性と敬虔とによって支配され得るものとなり、宗教の諸原理がそのまま精神に根付くものとなります。

私は、この問題を、まだ続けて述べたいと思います。自分勝手な意志は、すべての罪と悲惨さの根源ですから。それを子どもたちの内に根付かせてしまうならば、後になって悩み多さと無宗教とを招くことは確実です。

自分本位の生き方を監視し、抑制することは何でも、子どもたちの将来の幸福と敬虔を促進することにつながります。もし、私たちが、宗教とは、自我本

位ではなく、神様の御心を実践すること以外の何ものでもないと考え、この世の幸せと永遠の幸せにとっての大きな障害は、この我意を押し通すことであって、それを気ままにさせることは決して些細なことではなく、それを否定することは決して無益なことではないことを考えるならば、このことは、もっとはっきりとして来ます。天国であろうと地獄であろうと、それはこのことだけで決まるのです。ですから、子どもの中にある自分本位な生き方を抑制することを学ぶ親は、ひとりの魂を新しくさせ、救いに導くことによって、神様と共に働く者とさせます。それを放任している両親は、悪魔の業に加担して宗教を名ばかりのものとしてしまい、救いを得られないものとしてしまっ、親の中に働くすべてのことが、子どもの身心を永久に滅びへと落とし込んでしまうのです。

わが家の子どもたちの場合、ものが言えるようになると直ぐに、「主の祈り」を教えられて、朝、起きたときと、夜、寝るとき、いつもこれを唱えさせられました。少し大きくなって来ますと、主の祈りに加えて、両親のための短い祈り、いくつかの特祷文 [国教会での短い祈祷文]、覚えることが出来るほどの短い信仰問答文、聖書のある御言葉を教えられました。

子どもたちは、よくおしゃべりが出来たり、歩いたり出来るようになる前の小さな時から、安息日が、ほかの週日とは違った日であることを教えられました。彼らが跪いたり、しゃべったり出来るようになるずっと前から、家族礼拝では静かにしていること、礼拝が終わると、子どもたちはいつも仕草 [たとえば、手を合わせて祈ることなど] であろうか。祝福の祈りに和することを教えられました。

子どもたちは、たとえ泣いてせがんでも、何も得られないことを早くから理解させられていました。そして欲しいものについて、穏やかに求めることを教えられていました。もっとも下働きの召使いに対しても、「どうか何々をください」と言わなければ、何も与えられないこと、召使いが子どもであっても、言葉遣いを省いてはならないことを教えられました。神様の御名をみだりに唱えたり、呪いや不敬虔なことば、汚らわしいことば、下品で無作法な名を口にするのは、子どもたちの間では聞かれたことがありません。また、兄弟姉妹が互いの名前を呼び合うときにも、「ブラザーだれだれ」とか、「シスターだれだ

れ」とかを付けることなしに、名前を呼び捨てにすることは許されませんでした。

誰も5歳になるまでは、読み書きを教えられません。ケジィ (Kezzy) だけは例外で、困ったことでしたが、彼女はほかの子どもが数ヶ月で済むところを、数年間もかかる子どもだったからです

教え方は、次のようなものでした。ある子どもたちが学び始める前日には、家の中が片づけられ、ほかの子どもたちにそれぞれの仕事が割り当てられ、9時から12時までと、2時から5時まで、つまり、あなたが知っている通り、それが私たちの勉強時間だったのですが、その時間には部屋に入ってくるのが許されませんでした。字を覚えるために一日が課せられて、子どもたちは、それぞれこの時間帯に大文字と小文字とを覚えたのです。モリィ (Molly) とナンシー (Nancy) とは例外。彼女たちは、文字をすっかり覚えこむのに一日半かかったからです。私は彼女たちが、のろい子どもたちだとは思いましたが、どのくらいかかったら「こども用の教本 (the horn book)」を学ぶことができるのが、段々、分かってきましたので、それ以後は、私の考え方を変えました。しかし、なぜあのような教え方をしていたのかと言うと、ほかの子どもたちの覚え方がとても速かったからなのです。あなたの兄さんのサミュエルは、私が教えた最初の子どもでしたが、アルファベットを2,3時間で覚えてしまいました。彼が5歳になった2月10日のことでした。その翌日から勉強を始め、文字を覚えると直ぐに、創世記第1章を学び始めました。第1節の文字の綴りを教えられ、繰り返して読むことを教えられて、ついには、即座に何のためらいもなく読めるようになりました。こうして第2節、その次へと進み、第10節までの勉強を済ませて、その年の復活日 (イースター) までには間に合いませんでしたが、聖霊降臨日の週末には、第1章全体を見事に読むことができるまでになりました。それはサミュエルが繰り返して読み、非凡な記憶力を持っていたからであり、私が同じことを二度と繰り返して話して聞かせた記憶がないほどです。

しかも、不思議なことには、サミュエルはその学課で学んだ言葉は、聖書の中の言葉であれ、ほかの書物の中のことであれ、どこに書いてあった言葉を覚えていたということです。ですから、彼はすぐに英国人の著作なら十分に読

めるようになったのです。

同じ方法をほかの子どもたちすべてにもやって見ました。文字を覚えると直ぐに、まず、綴りを学ばせ、次に一行を、その次に一節を読むことを教えましたが、彼らの学課が長くても短くても、それを終わるまでは決して部屋を出しませんでした。こうして、ひとり、また、ひとりと勉強時間に読み方を学んでいき、勉強時間が終わる前に、休み時間なしに、それぞれの子どもたちに午前中に学んだことを読ませ、午後の勉強時間を終わるまでに、その日に勉強したところを読ませました。

大声でしゃべったり、遊んだりすることは許されません。むしろ、6時間の勉強時間には各自がしっかりと勉強をしなければなりません。我慢強さやすぐれた健康を持っていない子どもであっても、活発なやり方次第では、3ヶ月間にどれほど多くを学び取ることが出来るかは、信じられないほど素晴らしいものです。子どもたち一人一人は（ケジイは除くとして）その期間に婦人たちの多くが生涯かかって読むことが出来るものよりも、ずっと多くを読みこなしたのです。

それぞれの場所から立ち去ったり、室外に出て行ったりすることは、正当な理由がない限り許されず、教会の構内や庭や通りに飛び出すことなど、それなりの理由がない限り、たいへんなお仕置きを受けるようなことなのだ、いつも覚えさせました。

数年間は、このようにしてとてもうまく行っておりました。こんなに規則正しい素晴らしい生活をしてきた子どもたちはいません。敬虔さや両親への服従を受け入れた子どもたちは、ほかにいません。ただ、それはあの火事 [1709年2月9日の牧師館の火事のこと]の後、子どもたちがいくつかの家庭に預けられ、運命的な一家離散を味わうまでのことでした。それらの家庭で、子どもたちは、以前には禁じられていた召使いたちとの勝手なおしゃべりをするようになり、善悪の区別なしに遊びまわったり、ほかの子どもたちと遊んだりするようになりました。子どもたちは、やがて安息日を厳守することを軽んじるようになり、以前には、思いもつかなかったような歌を歌ったり、悪いことに手を染めたりするようになってしまいました。大事にしていた礼儀正しい行いや、実家にいたときに重んじていたことをほとんど失ってしまい、おどけた口調や下品な態

度を覚えてしまいました。これらのことをもう一度、改め直すためには、とても苦勞をいたしました。

牧師館が建て直され、子どもたちがみんな家に戻って来ましたので、私たちは厳しいしつけ直しを始めました。朝夕の勉強の初めと終わりには、詩編の御言葉を讚美することにしました。また、5時に勉強が終わる時間には、最年長の子どもが、話が出来最年少の子どもに、二番目に年長の子どもが下から二番目の幼い子どもに、というふうに、その日の詩編日課と新約聖書の1章を読み聞かせるようにし、次の朝には、詩編と旧約聖書の1章を聞かせるようにしました。その後で、朝食や家族との交わりの時間まで、それぞれの祈りの時を持ちました。この習慣が、今日でも私たちのうちで守られていることを、神様に感謝しています。

このほか、私の記憶に上ってこなかったいくつかの決め事が、私たちの家族にはありました。今まで述べてきた事柄のうちの、適当なところへ入れられるべき決め事です。しかし、役立つことだと思いますので、ここにいくつかを挙げておきます。

1. 処罰への臆病さと恐れは、しばしば、子どもたちにウソをつくことを教え、それがなかなか離れることが出来ない習慣になってしまうことが分かって来ました。このことを防ぐために、次の決まりが作られたのです。つまり、罰を受けるような過ちをおかした者は、それを正直に言い表し、改めることを約束するならば、誰もムチ打たれることはないという決まりです。この決め事は、大いにウソつきの防止に役立ちました。もし、家族のある人物も [夫サミュエル・シニアを指すと思われる。] この決まりを守ってくれたら、もっと防止に役立ったでしょうに、この人は打ち勝つことが出来なかったで、しばしば、見せ掛けやごまかしを押し付けられてしまいました。しかし、子どもたちは大事に守っていましたので、(一人 [娘ヘティのことか]を除けば) 誰も彼の真似をせず、いつも正直にほんとうのことを申しました。
2. 教会でウソをついたり、物をくすねたり、遊んだりするような罪深い行動や主の日の不従順やケンカなどに対しては、処罰を免れさせてはなりません。
3. どの子どもでも、同じ過ちのために、二度、小言を言われたり、叩かれたりすることはありません。もし、子どもたちがそれを改めたら、それ以後は、

同じ過ちのために咎められることはありません。

4. あらゆる従順ですぐれた行動は、特に、自発的な行動である場合、いつもほめられ、その理由のすばらしさ次第では、しばしば、ご褒美の対象にならなければなりません。
5. どんな子どもでも、従順な行動を取ったり、喜ばせようという考えをもって何かをしたならば、それがうまく出来ていなかったとしても、その従順と思いは大事に受け入れられるべきであり、その子どもが、喜んで、将来、もっとすばらしくなるように導かれるべきです。
6. 礼儀作法は破らずに守られねばなりません。どんなに小さなもの、たとえ、小銭1枚、ピンの1本のような価値のものであっても、他人の持ち物を持ち主の許しなしに、ましてや、持ち主に反して、取り上げてしまってはなりません。
この決まりは、子どもたちの心に教え込み過ぎるということは、決してありません。両親や保護者たちが、これを教え込むことの不十分さから、子どもたちをしてこの世で守るべき正義を不屈きにも軽んじるようにさせてしまうのです。
7. 約束は、しっかりと守るようにさせねばなりません。子どもたちが誰かに物を与えてから、つまり、その持ち主でなくなってから、それを取り戻したり、物を貰った人の自由にさせないようなことをさせてはなりません。そうでないと、与えた物は条件付で与えたことになり、約束した義務を果たせないことになってしまうからです。
8. 女の子どもは、上手に読むことが出来るようになるまでは、働くことを教えるはなりません。そして読めるようになったら、読むことにも働くことにも精出すようにしなければなりません。この決まりも、よく守らせねばならない決まりです。なぜ、きちんと聞き取ることが出来、理解できる読み方をする婦人たちがこんなにも少ないかと云えば、それは、子どもたちが読むことが出来る前に、裁縫を教え込まれてしまうからなのです。」

(日本フリー・メソジスト西田辺伝道所牧師)